

羽仁もと子と家計簿の思想

金銭教育の源流考

長沼行太郎（ながぬまこうたろう）

1 家計簿の不思議な力

20年ほど前、「羽仁もと子案 家計簿」をつけはじめて、わが家の暮らしぶりが見る見る変わっていくという体験をした。家計簿をつけたのは妻のだけれど、家計簿がもたらした生活の変化に他愛もなく驚嘆を發したのは、夫の私のほうだった。

例えば、それまでツルシで済ませていたスーツが、オーダーメイドで買えたときに私はちょっと感激した。親孝行のための家族の小旅行が実現した。長椅子やエアコンなどわが家にしてみれば待望の大きな買いものが難なくできるようになった。なんだか贅沢ができるようになったなと感じた。



こんなことを可能にしたのは、格別に神秘的なことではなく、「職業費」とか「特別費」とか「家具費」とかという費目で、あらかじめ予算を組む家庭経済のやりかただった。一種の計画経済である。その計画経済をコントロールしている仕掛けが家計簿であるというわけなのだった。

予算を組むためには、家の全収入はどれだけあるのか、はっきり頭に入れておかなければならない。羽仁もと子の家計簿では、収入を年収でとらえ、ボーナスなど（見積みり）も加えた全収入を12等分して、1ヶ月分の収入とみなす。こうすると、予算上の月収は現金の月収よりも大きくなる。実は、家計簿をつけるようになってから大きな買いものができるようになったと感じられたのは、このような金額のとらえ方によっていたのだ。もうすこし細かくいうと、収入予算は、毎月、給料月額と賞与月割との二本立てでいき、毎月決まった衣食住の生活費には原則として給料月額をわりあて、貯金や家具・衣服の新調などまとまった額の出費には賞与月額を当てるといようにする。

計画したことは必ずできる

それまでお金に関してはその日暮らしで、自分の家にどの程度の経済力があるのかとんとわからないでいたから、保険に入るにも、大きな買いものをするにも、そのたびに不安とリスクがともなった。それが、羽仁もと子の家計簿をつけ始めてから、買いものの目標が立つようになった。交際費や特別費を給料月額と賞与月割との二本立てで計上してあるから、慶弔や事故などの思いがけない出費のときにも困らなくなった。一言で言えば、買いたいものが自信をもって買えるようになった。この家計簿の前書きに書いてあった、「限られた収入でも、わが家に適した予算が立てられれば、計画したことは必ずできる」ということはほんとうだった。

家庭の目標を立て、それを予算によって実現するという「家計力」に自信をつけた私たちは、別荘やマイホームという、より大きな買いものに向かって進んでいくことになった……

というわけで、この家計簿は、私の先入観をうらぎって、欲望の実現を可能にする装置であった。もちろんこれは、他方では、制欲あるいは禁欲のためのチェック装置としてもはたらく。前年度の結果と今年度の予定を勘案して費目ごとに立てる年間の支出の予算額が、月割りに換算して家計簿の各費目の先頭に掲げてある。この予算額がいつも家庭経済を監視している。予算オーバーしやすい副食物費にかぎっては、日割の予算額まで出してあって、

毎日の買いものをチェックしている。だからそれまでのように、無駄な買いものはできない。必要が無駄かの判別は微妙で曖昧なものだが、予算額はきっぱりした分界線をひいてその曖昧な心理を突いてくる。つらいことに全集本の予約購読を衝動的にするなんてことはできなくなった。

まあ、これらを総じていえば、この家計簿は、ひたすら使いすぎないようにと私たちを萎縮させる一方のものではなかった。予算総額をいつも目の前に置いて、使っただけずつそこから引いて残額をいちいち書きこむことになっているから、見通しがたち、むしろ予算が実行されやすくなる。予算オーバーしても翌日または翌月に回復措置を講じることができる。年間を通してつじつまがあえばよいという弾力性をもっている。

家事のスタイルが変わった

こんなふう到家計が変わると、それにともなって、家事のスタイルが変わった。手作りが基調になった。外食はしないで弁当、菓子類はすべて手作り、スリッパもちょっとした家具（一閑張りの衣装ケース）も手作り、子供の衣服も手作り（か買い物）という具合に、わが家に手業（てわざ）の技術がはいってきた。こうした技術は、『婦人之友』の読者組織である「友の会」で講習会があり、ベテランの主婦たちが教えてくれた。家計簿の集計も報告されて全国集計される。これがまたデータになって返ってきて、わが家の予算を立てるときの参考になる。ちいさな家計簿に全国規模の組織的な支援があった。



実をいうと、わが家は模範的な家計簿のつけ手であったわけではない。初めの5年間で頭金をつくりバブルの絶頂期にマイホームを購入、それ以後は住宅ローンの返済期にはいった。妻が「専業主婦」ではいられなくなり再び会社勤めを始めるとともに、家計簿をつける習慣は段々と消えていき、後の5年間くらいは家計簿を購入しても年度の途中で挫折している。それにもかかわらず、家計簿には不思議な威力がある、という印象を夫婦でもってしまったのは、初めの5年間の記憶が強烈に残っているためだろう。ただ、今年から、羽仁もと子の家計簿がパソコン・ソフトにもなっていることを知ったので、今度はライフプランという新しい課題と連携させながら、再び家計簿にチャレンジしている。

2 簿記の思想 ロビンソン・クルーソーと羽仁もと子

もと子がこの家計簿を発明するのは、1904年（明治37年）なのだが、明治20年代には、女学校で家計簿記を教えることが始まっているから、もと子のそれも、それ以前の、並べ書きして月末に総額をだす「小遣帳」のたぐいとはことなる近代簿記の流れのなかに位置づけることができる。しかし、もと子の考案した予算の扱いには、他の簿記とは異なる際だった特徴がある。

家計簿の考案

もと子は日本初の女性記者であった報知新聞時代に同僚の羽仁吉一と結婚、1903年に夫婦で『家庭之友』（『婦人之友』の前身）を刊行し始めた頃に、家計簿を創案した。

「忙しい私たちの新家庭の経済は、いつでも予算超過をします。……どうしようかと始終心にかかっているうちに、ついに思いついたのは、今の家計簿の様式でした」（『半生を語る』）

この予算超過を克服する方法を思いついた経緯が、もと子の家事家計の思想を集大成した『家事家計篇』（1927年）に詳しく語られている。

「今から二十五年前、それは家庭之友を出して、間もないころのことでした。当時、新聞社に勤めていた主人の小遣は、月に十二円でした。何もむだづかいをする人でないのに、どうしてもそれが一と月もたないことから、こんなことを考えました。一日分をまず三十五銭ずつとして、一日にはがま口の中に三十五銭だけ入れておく、翌日それが十五銭あまっても、また三十五銭入れておく、そういうことです。主人もそれは面白いといいました。月はじめに少しずつ節約していると、六、七日目には銀貨が一円札になります。するとその一円札は使わないで、つぎつぎにいれる銀貨で間にあわせています。日曜など社に出ないで、どこか二人で散歩に行つて、家計のほうの娯楽費からその費用をだした日にも、小遣は同じことです。それに日に三十五銭ずつとすれば、十二円のうちから大体一円五十銭あまっていることになり、それらを一緒にして、その時分の宴会費などはそれで払うことができました。

それからふっとこの家計簿のことを思いついたのです。」

日割の予算額を立てる点は先に「副食物費」のところでも述べた方法と同じである。また、米・燃料・調味料など毎日の出費ではない費目については、月割の予算額を立てて調節する。また夫の「小遣」と家庭の「娯楽費」とを別の費目として処理しているところは、予算生活のルールとして注目したい。

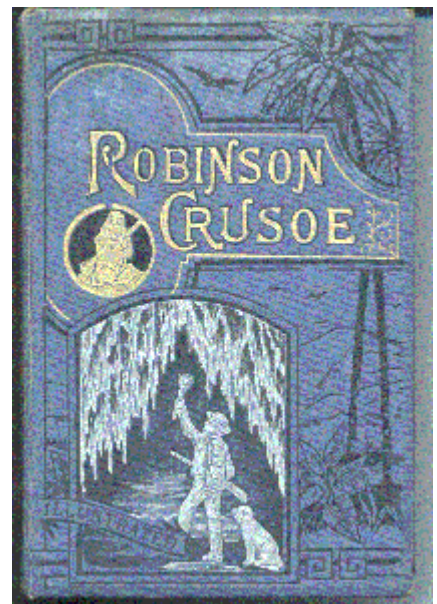
もと子は家計の大枠を、中流の俸給生活者（サラリーマン）を基準にして、年収の80%を生活費に、10%を純貯金に、6%を臨時費（出産・病氣）に、3%を生命保険に、そして1%を「他人のため社会のため」の公共費に、振り分けるよう提案している。この最後の公共費などは、もと子の、家庭と社会との関係についての思想のあるところで、わが家でこれを始めたとき、襟元をただされる思いがしたものだ。寄附ができるようになるなんて、それまで思ってもみなかったこと、わが家も人並みになった、いや上流家庭に仲間入りしたみたいだ、とだいぶオーバーに誇らしい気持ちを味わったものだ。

簿記小説「ロビンソン・クルーソー」

羽仁もと子の家計簿のことを考えると、私の連想はダニエル・デフォー作『ロビンソン・クルーソー』のなかにでてくる「ロビンソンの帳簿」にいく。あの複式簿記の形式で、絶望を希望に変えていくロビンソンである。経済史家たちはこの作品のなかに、自由で独立自尊の近代人の原型を見いだした（マックス・ウェーバー、大塚久雄）。

ダニエル・デフォー作のこの小説は、日本でも幕末時代から紹介されて、鎖国下の日本では発禁本であったそうであり、またいまでは子供読み物の部類に入っているけれども、原点に帰るつもりでおとなが読んでみると、新しい発見がありそうだ。ブラジルで農園経営を4年間やっていた27歳のロビンソン・クルーソーは、黒人奴隷の捕獲のためにギニアの海岸を目指して乗りだすのだが、ハリケーンのために遭難し、ブラジル北方の無人島に漂着する。

無人島に漂着したロビンソン・クルーソーは、生活上の難問を次々と解決するのだが、心の悩みも、同じ手際で解決する。その方法がいかにもデフォーらしくふるっている。かれは、難破船から持ち出した紙とペンで、貸借対照表をつくる。つまり自分が陥った苦境を簿記の形式で冷静に検討する。いや、実は、無人島生活前のプランテーションの経営や奴隷貿易から、無人島を脱出後の裕福な家庭生活まで描いた長大なこの小説は、どの事件をとっても、もとで（資本）がいくらでその結果いくら儲かったというポンド計算で占められた壮大な「簿記小説」であったといってよい。事件はことごとく、遭難とその解決、投資ともうけ、というストーリーに要約される、いわば「企て」の精神でみなぎっている。



「私は公平に、簿記という貸方と借方といった具合に、自分がめぐまれている有利な点と苦しんでいる不利な点

とを次のように対照してみた。(『ロビンソン・クルーソー(上)』平井正穂訳,岩波文庫一九六七年刊。原書は一七一九年刊)

悪い点

- 1 x 私はおそろしい孤島に漂着し、救われる望みはまったくない。
- 2 x 私は全世界からただ一人除け者にされ、いわば隔離されて悲惨な生活をおくっている。
- 3 x 私は全人類から絶縁されている孤独者であり、人間社会から追放された者である。
- 4 x 身にまとうべき衣類もない。
- 5 x 私は人間や獣の襲撃に抵抗するなんらの防禦手段ももたない。
- 6 x 私には話し相手も、自分を慰めてくれる人もいない。

善い点

- 1 しかし、他の乗組員全員が溺れたのに、私はそれを免れてげんにこうやって生きている。
- 2 だが自分一人が乗組員全員から除外されたからこそ死を免れたのだ。奇蹟的に私を死からすくってくれた神は、この境遇からもすくいだすことができるはずである。
- 3 だが、食うものもない不毛の地で餓死するという運命を免れている。
- 4 だがさいわい暑い気候のところにいる。ここでは衣類があってもまず着ることもできまい。
- 5 だが私がうち上げられたこの島には、たとえばアフリカの海岸でみたような人間に害を加える野獣の姿はみられない。もしアフリカの海岸沖で難破していたとしたら私はどうなっていたであろうか。
- 6 だが有難いことに神が浜辺近く船をおし流してくれたため、多くの物資をとりだすことができた。これだけあれば生きているかぎり自分の必要をみたすこともできるし、またなんとか必要なものを手にいれることもできる。

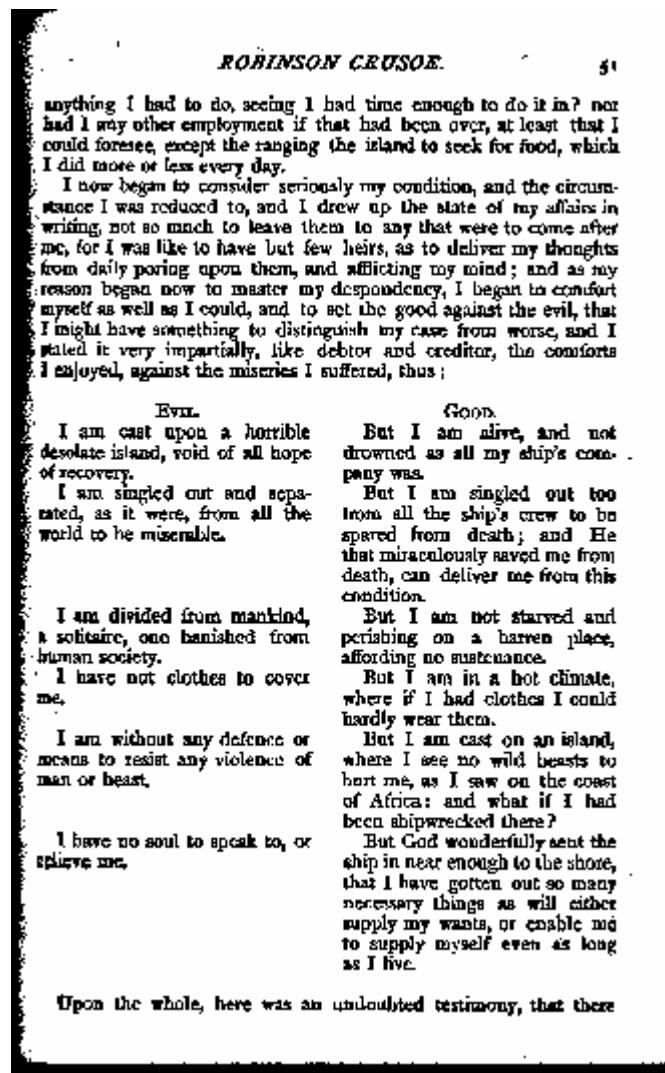
ここでは、例えば預金という同じ行為が、一方では現金の消失ともみられるし、他方では資産の増加とも解される、という複式簿記の発想が採用されている点が注目になる。この複式簿記の発想が、ドイツの社会学者マックス・ウェーバーによれば、資本主義の成立に大きな役割を果たしたということだからだ。

ロビンソンは、問題項目の一つ一つについて、借方での損失と思われるものを粘りよく検討することを通して、貸方の方でそれに見合う資産の増価を見つけだそうと努力している。

そして、ロビンソンはこんな結論をひきだす。

「要するに、この世のなかでまたとないと思われるほど痛ましい境涯にあっても、そこには多かれ少なかれ感謝に値するなにかがあるということを、私の対照表は明らかに示していた。世界じゅうで最悪の悲境に苦しんだ者として、私が入りにくいことは、どんな悲境にあってもそこにはわれわれの心を励ましてくれるなにかがあるということ、良いことと悪いこととの貸借勘定ではけっきょく貸し方のほうに歩があるということ、これである。」

イギリスが七つの海に雄飛する時代を背景にしたデフォーの明るく力強いメッセージが聞こえてくるようである。こうして、ロビンソンは、絶望を希望に変え、生活条件を改善する努力へと乗りだしていくことになる。



帳簿 問題解決の装置

もうお気づきのことと思うけれども、帳簿は英語で book、そう、この絶えず書きこまれていく「開かれた本」は、記憶装置であるばかりでなく、マイナスをプラスに転化する問題解決の装置なのだった。帳簿は企業経営の模型、つまり、私たちの問題解決のモデルである。こう考えると、無味乾燥に見える簿記というものがダイナミックな魅力を帯びてくる。

すでに見たもと子の家計簿は、マイナスをプラスに変えるこのロビンソンの複式簿記の発想のうえに、さらに新しい工夫を付け加えた。それは、家庭の目標を予算額として形あるものにしておき、実現してしまうという、「企ての精神」とでも呼ぶべきものを装置化したということだろう。

どちらの場合にも、簿記は、不可能と思われることを可能に変える装置という点で共通している。両者の根底には、プロテスタントの思想がある。植村正久に従い、夫婦ともにプロテスタントの信仰をもち（「信仰する人」であり）『婦人友』を出版し、自由学園の創設・経営をおこなう企業人（「企てる人」）でもあったもと子にも、その精神の体現をみることができる。

ただ、もと子の家庭経済論は、利潤追求の資本主義的な企業論とは、その目的において一線を画している。「われわれの家庭生活に入用なだけの金がほしい、そしてそれ以外の金はないほうがよい」 余剰は呪われる、というシンプルライフの思想である。

3 「家族の時代」の終りと家事家計

最後に、家計の場としての家族そのものに根本からの変容がおきていることについてもふれておきたい。

家庭経済を労力（家事）と財力（家計）の二つの力から構成するもと子の思想にたいして、当時から、家事は女性の天才を枯らすとして、家事を市場価値で評価せよ、という思想も主張されていた（平塚らいてう）。このことは「主婦」であることと「職業」をもつこととが両立するか否か、という切実な議論の対立となってもあらわれた。むろん、両立するとする立場にもと子、両立しないとする立場にらいてうがいた。

しかし、こうした議論もふくめ、もはや「家庭の危機」とか「家族の解体」とか論議された時期は過ぎ、「主婦」「家事」「家計」「団欒」といったキーワードで構成されてきた「家族の時代」そのものが終る兆候がみられるようになった。家族を単位とする社会から「個人を単位とする社会」への方向も示唆されている（落合恵美子）。これは一社会の時代風潮というよりは、グローバルな規模で進む、不可逆の人口学的な傾向であるらしい。

日本では、およそ昭和ひとけたから団塊の世代（1925年から1950年生まれ）までの世代が、第二の人口爆発の世代（第一の人口爆発は産業革命期、日本では明治から）と呼ばれ、戦後の家族の主役だった。この兄弟姉妹が多く人口規模の大きな世代がその人口的条件ゆえに可能にした「家族」像が理想視され、法規もふくめて現代家族をしばってきた。

ところが、いまや、この第2世代が高齢化にはいり、時代は親2人・子4人の第2世代から、親2人・子2人の第三世代の時代に移行している。それとともに核家族化も低下傾向である。家も墓も子孫に継承される条件がなくなってきた。きょうだい揃って親を扶養した世代がいま親として、「子供には迷惑をかけたくない」と、家と墓の継承を「断念」せざるをえない崖っぷちにいる。生者の世界も死者の世界もふくめて、大きな断絶の時代にたちあっているのである。ちなみに、第1節で家計簿の体験を述べたわが家の場合も、この第2世代の末端に属している。

羽仁もと子以来、連綿と蓄積された「友の会」の家事家計の技術と思想は、今後どうなっていくのだろうか。

羽仁もと子の家事家計の技術の根底には、よき家庭がよき社会をつくる、という思想があった。家計簿にも、家計を充足させ余剰を社会に公共費として提供していく（「家庭は簡素に社会は豊かに」という使命があった。「家族」や「主婦」が社会の普遍的なありかたではなくなり、それらはある選択のひとつにすぎなくなり、個人を単位とする社会になったとしても、その個人も、労力と財力を行使する家事・家計に似た営みを行わねばならない。家計簿はいわば「個計簿」のようなかたちで工夫されてもよいのではないだろうか。そしてそのときの標語は、やはり、「個人は簡素に社会は豊かに」ということになるかもしれない。

初出：

原題：「日本人の家事思想 羽仁もと子と家計簿」

- ・2002年、リビングデザインセンターのOZONE主催の展覧会『日本人とすまい第7回企画展・家事』に併せて刊行された『につぼん家事録』所載。
- ・2002/05/01刊 『CONFORT [コンフォルト] 5月増刊 につぼん家事録』（KK建築資料研究社発行）に再録
- ・今回、改題・補筆（2006年12月）